

山村 真司

聞き手

奥田浩一

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所 研究員

より便利で、より快適な暮らしを実現するものとして、注目を集める「スマート」。しかし、これまでの議論は、技術そのものや構想などのいわば供給者側からのメッセージが中心であった。では、日々を暮らす私たち生活者にとって「スマート」とは、どのような意味があるのだろうか。生活者を中心におくことで見えてくる「スマート」な社会とは――。スマートについて、数多くの実例を踏まえた、幅広い知見をお持ちの山村氏にお話を伺った。

「スマート」とは何か

―― 今日、「スマート」という言葉をよく聞くようになりました。まず「スマート」とはどのようなものを対象としているのか、どのようなトピックスを含むものなのか、からお話いただけますでしょうか。

―― 「スマート」が重要視されるようになってきた社会的背景は何でしょうか。

山村 今日の「スマート」への注目は、差し迫った問題があつてこそだと思います。エネルギー問題などはもはや無視できないですし、先進国、特に日本では高齢化問題も待たなしの状況です。そのような問題に対応していくために「スマート」が出てきた。「スマート」への注目度には、そういう意味で大きな背景があります。

ただし、「スマート」をユニバーサルなイメージで捉えることには注意すべきでしょう。これが「スマート」というような画一的なものはありません。建物では、同じ敷地、同じ用途でも、目的や設計次第で違う建物になります。コミュニティについても、いかに使うか、つまり生活者の視点に立てば、コミュニティは総じて独自のものになるはずで、画一的なスマートコミュニティというものはありません。

生活者発想の重要性

―― 山村さんはご著書『スマートシティはどうくる?』の中で「生活者発想のスマート化が重要である」と主張されています。一般に「スマート」は「技術の問題だ」と思う方も多いようですが、生活者発想とはそもそもどのようなのでしょうか。

山村 「スマート」は、技術(特にインフラ関連)の供給者側だけで実現できるものではないというこ

うか。

山村 私は、「スマート」化とは、昨今のICT(情報通信技術)の発展などにより、人と人のみならずモノやサービスが生活者と、そしてモノやサービス相互の間でも、双方向に繋がり、有効に機能することと捉えています。ですからエネルギーはもちろん、教育や医療まで、これまで繋がらなかった生活に関連するさまざまな分野が「スマート」の対象になると考えています。

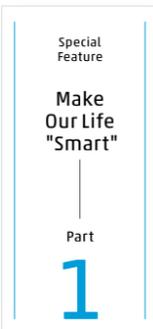
とです。技術を利用する側、それはB(ビジネス、事業者)とC(コンシューマー、消費者)、そしてガバメント(国や自治体)も含めて大きく3つでしょうか。彼らは、ある技術なり製品を送り出す側ではありません。そういう立場の人たちが「スマート」をどう受け止め、利用するのかという発想が必要なのですが、残念ながら、そうした動きはまだこれからであるというのが現状です。

例えば、家電製品は、徹底的なマーケットリサー



「スマート」というのは、これまで繋がらなかったものを繋げるもので、いわばコトも繋げていくものと言えます。

Yamamura Shinji



「スマート」を俯瞰する

山村 もちろんICTなど技術の発展があつてこそ、スマートの議論ができる時代になったことは事実です。サブライヤー側から発信する発想が、一概によくないとも言えないし、むしろ常になければならない。しかし、モノ（技術や商品）とコト（モノを使う状況や生活のありよう）の発想をどう融合させるか、そこが必要なのです。冒頭でも申し上げた通り、スマートというものは、これまで繋がらなかったものを繋げるもので、いわばコトも繋げていくものと言えます。

—— だとすれば、一方のみに偏らないためにも、何らかの仕組みづくりが必要になりますね。それに関連して山村さんは「プラットフォーム的な考えが重要」と述べられています。そこでおっしゃるプラットフォームとはどのようなものでしょうか。

山村 経済やエネルギー、各種インフラや社会、文化に至るまで、多様な事象を共通の場に乗せて議論することが、これからのコミュニティや社会を考えるうえで重要です。そのような議論をする場こそがプラットフォームです。そして、こうした場を設けることは、私たちが次世代に向けて、どのような社会を希望するかを議論することでもあります。現実と折り合いをつけつつ、実現できることを選択していく視点が、今必要なのです。

—— コミュニティの中でひとつの共通認識のようなものを作り、そのうえで人びとの暮らしがどうあるべきかを考えるということですね。

山村 はい。ただ、その際に「スマート」が期待通りに効率を上げるには、人と人との直接のコミュニケーションなどのように、一見非効率に見えるもの



効率化するものと
しないものが混在する社会、
つまり社会へのかかわり方に
多様化が許されるような社会が
スマート化の進んだ社会
だと思えます。

Yamamura Shinji

2番目が生まれたら、上の子は退園させられるという不思議なニュースも耳にしました。社会に参加する意欲がそがれる要素が、これまでよりも明らかに増えていると感じています。

効率ばかりが優先されると、そこに適した暮らし方が、あるいはトラディショナルとでもいうような文化も含め、消えていくことになりかねない気がするのです。そういうものもなるべく救い、うまく活かすことを考えるべきです。

おのずとそれは、社会の多様性にも繋がっていくはずで。女性の社会参加の機会は増え、高齢者支援も進む。要するに、切り捨てを減らせば減らすほど、社会は安定化し活性化するのではないのでしょうか。そんな社会の実現のためにも「スマート」が使えるのだと思います。

—— 社会としての豊かさを考える時、技術の進歩や効率化のみが行き過ぎると切り捨てが出てきてしまう。そうではなく、人間が人間らしさを取り戻していく場の確保が重要だということですね。

山村 そうです。そういう場を提供し、手助けすることも「スマート」の役割だと言えるでしょう。もちろん、エネルギーなどはほとんど効率化すればいい。でも、効率化を必要としない分野もきつとたくさんあるはず。効率化するものとしらないものが

も必要です。例えば、現代はウェブ会議などで海外との打ち合わせも容易な時代です。時差を活用すれば24時間仕事ができます。このような手法は、ビジネスなど効率を求める場面ならばいいかもしれませんが、プライベートな生活でこうした効率化を望んでいる人が、果たしてどれほどおられるでしょうか。「無駄な行為をちゃんと残すんだよ」「その無駄を、わざわざハイテクを使って支えるんだよ」ということも、コミュニティに参加する人びとの共通認識にすることが、大切なことだと言えるでしょう。

—— 技術の活用というと、時間を短くする、効率を上げることばかりが目されるけれど、人の営みが行われる生活の場ということを考えて、やはり一見無駄だと思えるようなものも、社会の余裕度として必要なものは取り入れる必要があるということですね。

山村 その通りです。

コミュニティの 捉え方

—— では、そのような考え方で実現されるコミュニティの将来像とは、どのようなものでしょうか。

山村 一言でいうと、「負け組が少ない社会」ではないかと思っています。例えば、遠隔地では適切な医療を受ける機会が少ない。その一方で、大都市では待機児童が多すぎて、子どもを生みたくても生む決断をしにくい。そんなケースがあります。最近では、

混在する社会、つまり社会へのかかわり方に多様化が許されるような社会が、「スマート」化の進んだ社会だと思っています。

—— 都会で先進的な技術に囲まれて生活したい人、郊外で自然と触れあいながら自分なりのペースで仕事をしたい人など、生活者の想いはさまざまです。多様な社会を実現する際、彼らの幅広い意見をどう汲み取っていけばいいのでしょうか。

山村 多様な意見を取り込む社会とは、議論を出すことができる、また引込めることもできるような場のある社会ではないでしょうか。そういう場をソフト面とハード面の両面にわたって用意することだと思います。例えば、柏の葉キャンパス（*）では、不動産会社が設計前から、住民参加の組織を立ち上げ、住民の方々の意見を聞くというソフトな取り組みから始めました。やがて彼らの声が届いて、住民の意識も高まり、ハードの建設にも繋がりました。そんな場を持つことも一案でしょう。

—— 生活者の方が「スマート」化の先行例を見る時のポイントなどありましたら、お聞かせください。
山村 何がしたいかがカギだと思います。「こうしたい」「だからこんなものが欲しい」「ないなら作る」というように、どうしたいのかを考えつつ見ることが一助になるでしょう。

—— 実際、本号の特集内でも事例を取り上げますが、最先端の技術を使わず、人のネットワークで高齢者を支える事例も紹介します（18頁）。そういったものも、「スマート」なコミュニティになるんでしょうね。

山村 はい、そう思います。

<http://www.kashiwanoha-smartcity.com/>

（*）柏の葉キャンパスは千葉県柏市に展開するスマートシティ。世界の課題解決モデルとして「環境共生都市」「新産業創造都市」「健康長寿都市」を目指す。

スマートな 社会の展望

—— さらにお聞きします。生活者目線でのスマートな社会として、どのような社会を展望されておられるのでしょうか。

山村 都市化の進展を考えれば、通勤の場所と時間を自由に選択できるような社会がひとつありますね。通勤環境が改善されると、生活や経済活動にも好影響が期待できます。また、高齢化への対応として、40〜50代の人が仕事の第一線から大きく外れることなく介護もできるような社会。さらには、女性が子育てをしつつ、社会参加できるような社会といったところでしょうか。

—— このような社会の実現で重要なのは、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションです。どれだけ技術が進歩しても、やはり人間は対面、あるいはそれに非常に近い状況を求めると思います。機械にだけ任せるのではなく、人の介在がより不可欠になるのです。

—— そのようなスマートな社会の実現に向けて、注意すべきことは何でしょうか。

山村 けいはんな学研都市（京都府精華町）のように、国主導のスマートコミュニティは現在、実証実験が終わり、実用化に差し掛かったところです。これからは、持続できる事業化というものを考える段階になります。実験でいろんな技術を使っただけけど、お金がなくなったら終わりだ、となってしまうのは、

いこうとされる方にとって、かなり重要なメッセージだと思われれます。

—— 最後にありますが、これからも私たちはいろんな情報に接していくでしょう。新しい技術だけに振り回されることを極力避けるためにも、生活者の立場から、どのような態度で接していけばよいのでしょうか。

山村 たしかに、情報に振り回されていますよね（笑）。今はよい面しか言われていませんから、そういうところばかりを見て、「取り組んだけダメだった」と言われることはまありません。結局、スマート化なんておカネばかりがかかる、と。そこを乗り越えるために、どこが課題で、問題は何かときちんと明るみにし、いい情報も悪い情報も、プラットフォームに出すことが肝心だと思います。しかも悪い情報は提示するだけではなく、課題として受け止め、どういう解決があるかを考えることがより大切になるでしょう。

—— ひとつのニュースというのは、光があり影もあるのだから、いいところはしっかり共有し、悪いところは課題としてとらえて、解決策を含めてみんなで考える、そういう姿勢が大事なですね。

山村 結局はバランスです。私は5年、10年後には「スマート」という言葉がなくなり、社会インフラとして当たり前になることを期待しているのです。スマートって「万能の薬」のような感じを与えませんか、「なんだか凄いだろ」と（笑）。実際、私の著書を読まれた方が、ネット上で感想を述べたものを目にしましたが、「なんかもっと凄いものだと思っただけ、それでもなかった」とありました。私

せつかくの機会を失います。規制緩和なども含めてのことですが、それをどう継続するかという視点で議論すること、そこに注意を振り向ける必要があるかと思えます。ヨーロッパなどにも目を向け、事例を参考にしながら、日本独自の進め方というのも考慮に入れて進めることもできるはずですよ。

—— 地域ごとに行われている、また、行われようとしているスマートの試みについての今後の展開はいかがでしょうか。どこに注意を振り向ける必要がありますか。



私は5年、10年後には「スマート」という言葉がなくなり、社会インフラとして当たり前になることを期待しています。

Yamamura Shinji

山村 さまざまな人が参加しやすい枠組みづくりを重視することが大切です。小さな取り組みの情報をひとつところに集め、みんなで共有化する、そんなイメージでしょうか。いろいろな事例を知り、自分たちでできることは何か、ということを考える枠組みを持つことも展開のひとつだと思います。

—— いろんなところで行われている事例のいいところを、みんなで共有することによって、また新しい、いい試みができるということですね。今お聞きしたことは、これからスマートについて考えて

はスマートってそんなもんじゃないと思うのです。凄さも見せながら、身近にあるものとして、将来的に埋没していくべきものだと考えているのです。目立たなくなっただけで、コミュニケーションというものが支えられていく、そういうイメージを持っています。

—— 本来のスマートとは、人間がどう暮らしていくのかということとほぼ同義であり、そういった視点で考えていく、取り組んでいくことが大切だということでしょうか。

山村 よりよい生活を実現するために、あるいは環境を壊さずエネルギーをうまく使いこなすために、その道具として技術は重要です。しかし、さらに大事なのは使い方の工夫なのです。今、とてもいいものが目の前に出現しつつあるのだから、使える工夫を考えましょうという態度を、作る方だけでなく使う方にも是非、理解していただければと思います。

—— やはり使い手、すなわち、生活者重視の姿勢が基本なのですね。

山村 そうです。使い方に声を上げるのは、まず生活者です。そこから声を上げないと、本心に打ち上げ花火で終わってしまいます。スマートの利用価値は生活者の視点が決めるのです。

Yamamura Shinji

やまむら・しんじ／㈱日建設計総合研究所 理事 上席研究員。東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。博士（工学）。1989年、日建設計に入社後、2006年より現職。各種建築の環境計画、都市の環境配慮・低炭素計画および評価を専門とし、さいたまスーパーアリーナや天津子家堡金融区開発など国内外のプロジェクトで多くの実績を持つ。著書に「スマートシティはどうつくる？」がある。